The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	思い出の日々
Author(s)	大峯, 顯
Citation	メタフュシカ. 2007, 38, p. 5-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10427
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

思い出の日々

大峯　顯

故溝口宏平教授（以下親しく溝口君と呼ばせていただく）が倫理学担当の若い助教授として教養部に着任したのは、昭和 58 年の 4 月であった。溝口君が私の研究室へ挨拶にやって来た日、待兼山の桜はちょうど満開であった。窓下の池をとりまく一面の桜の花を見ながら、四方山ばなしをしたように思う。遠いむかしのようでもあり、またついこのあいだのことのようでもある。

私は平成 5 年 3 月で停年退官したので、教養部で溝口君と一緒の日を過ごしたのは 10 年ほどであった。私の研究室は当時のイ号館の 3 階にあり、溝口君は 4 階の研究室を使っていた。出勤して来るとかならず私の部屋に顔を見せるならわしであった。ドアをノックすると同時に「溝口です」と言いながら部屋に入って来た。このノックの音と声は、いまもなおなまなましく鮮明に耳の底に残っている。

どんなになまなましく鮮明だとしても、要するにそれは記憶であって、本人は実在しないではないかと言われるかもしれない。しかし、この種の言い方は、人間とは要するに目に見える肉体であり、心の出来事は物質の反映に過ぎないという唯物論に汚染されているのである。私はそうは思わない。この世では目に見える形をとって現れていた溝口君という人の存在そのものは、生きている私たちの目に見えなくなっただけであって、決して無くなったのではない。それは私の思いの中で変らず実在しているのである。

いろいろな思い出があった。教養部で一緒だった 10 年、その後を入れると 23 年に及ぶ溝口君との交友の場面は、数々の写真になって私のアルバムに収まっている。研究室が招いた外国人学者たちの歓迎夕食会、各地での日本フィヒテ協会の大会、文部省在外研究員としてドイツへ出発する溝口君を送る吉野山での歓送会、研究室の秘書だった小泉優子さんの結婚式、京大の T 教授と一緒の拙宅での会食。大阪大学 50 周年記念国際シンポジウム「21 世紀の世界像を求めて――哲学・宗教・芸術――」。その他なつかしい写真ばかりである。私の最終講義や退官記念パーティーの際の写真の中に溝口君の姿だけが見えないのは、在外研究員として、ちょうどチュービンゲンに滞在していた時だったことが日記を調べてわかった。教養部発行の『研究集録　人文・社会科学・社会科学　第 41 輯』（1992 年）の中に私を送る溝口君の一文が載っているが、それ

を見ると「平成 4 年 10 月 24 日　チュービンゲンにて」という日付になっている。

私が阪大で過ごした 13 年間は、これまでの研究生活の中で、最も快適で充実した歳月であったが、それはひとえに多くの優秀で、人間的にも気持よい同僚たちの存在のたまものだった。とりわけ、研究室の運営などについては、あまり現実的でない私を助けてくれた溝口君の行きとどいた配慮が大きかったことを思い今でも感謝している。

溝口君がドイツへ出発する時の記憶が空白なのはどうしたことだろう。不思議に思って、やはり日記を見ると、ちょうど私がアメリカへ行って留守中のことだったのである。日記によると私は平成 4 年 7 月 29 日からボストン大学での「東西宗教交流会議」という学会に出張していて 8 月 10 日に帰って来た。この留守中に、ほとんど私と入れちがいに溝口君はチュービンゲンへ発ったわけである。ついでに、もうすこし、その前後の日記の記事を写しておく。「7 月 27 日、研究室で溝口君に、ヴッパタールの W･ヤンケ教授夫妻への俳句の色紙をことづける」。「8 月 2 日。夜 10 時頃、チュービンゲンの溝口君から電話があった由。元気だったとのこと」。無事の到着を知らせる溝口君の電話を私の留守に家内が受けたわけである。

ドイツ滞在中の溝口君からは、チュービンゲンの哲学研究室やゼミの様子などについての精しい手紙が何度かとどいた。しかし、そのうちに、哲学上の議論はなんとかやっているが、日常会話は依然として物にならないし､ドイツ料理にもなかなかなじめないというような便りも貰った。私は自分の留学時代の昔を思い出して、たいがいの人はそういうものであって、たぶん帰国する頃になったら慣れるだろうから、まあのんびりとやるのがよい、というようなことを書いて励ましたりした。ドイツの犬はみな獰猛でもう一つ好きになれない、この頃は危いのでいつも棒切れを持って散歩しているというような、冗談とも真面目ともつかないことを書いた手紙が来たこともある。私もむかし、ハイデルベルクの郊外でいきなり吼えかかって来た巨大なドーベルマンの緋色の瞳を思い浮かべた。とにかく、律義で几帳面な性格の溝口君にとって、チュービンゲンの生活は、かなり骨の折れることだろうと想像することは出来た。それだけに、平成 5 年の初夏、無事の帰国を知らせる元気な声を受話器の向う側に聞けたのは大きなよろこびであった。

この年の 4 月から私は龍谷大学に勤めたので、溝口君と顔を合わせる機会はすくなくなった。それでも 7 月に開催された「大阪大学 50 周年記念国際シンポジウム」には、いつも通り元気な姿があったし、それから数年後だったと思うが、一般共通科目の教育の理念についての当時の副学長の先生と私との対談を企画してその司会役をつとめてくれたりしたこともある。病気の影などどこにもない元気な溝口君であった。

そんな溝口君が急に体調を崩して入院したということを聞かされたのは、平成 16 年の夏ごろだったろうか。文字どおり青天の霹靂であった。国立大学の法人化にともなう基構改革の仕事で多忙が続いたための過労だろうと思って、こちらも繁忙にまぎれて病院に見舞うこともなく過ぎていた。それから間もなく、教養部の同僚だった原田平作教授からの葉書の末尾に、溝口君の病気があまり快くないらしいという言葉を見てびっくりした。ちょうど講義のため渡米する直前のことであった。アメリカから帰るなりすぐ、駒山さんと連絡をとり、阪大病院外科病棟の 11 階の 11 号室に入院している溝口君に会いに行った。

溝口君は点滴のためか顔色も快く、思っていたほどやつれてはいなかった。ベットに座ったままで、病気がかなり進行していて、根本的な治療はもはや手遅れになっているというようなことを静かな口調で語った。今日もまた、これから小さな手術をするが、それはまあ気休めみたいなものだとつけ加える。私は何と応えるべきであったか。

手術室に入ると言うので。握手の手をさし出すと、溝口君は私の手を両手で握って、「先生、今生のお別れです」と言って涙を流した。夫人と二人のお嬢さんも泣かれた。「溝口君、病気と寿命とは別だよ。それに門田先生が主治医ならきっと大丈夫だ。また来るから頑張れ」と私は言う他なかった。廊下に出てしばらくすると、上のお嬢さんが後を追いかけて来て、「先生に握手して頂いて、父はほんとうに喜んでいました」と言われた。平成 16 年の 9 月 3 日、きびしい残暑が骨身にこたえる日であった。

絶望的に思われた溝口君の病状はその後奇跡的に快方に向い、翌年の新学期からは、授業に復帰することができた。アメリカで開発された新しい抗癌剤の効果だったのだろうか。「もう講義しておられますよ」という駒山さんの思いがけない電話を聞いたときは、パッと光が射す思いであった。しかしながら、平成 18 年 6 月 22 日の夕方、溝口君の逝去を告げられたのもやはり駒山さんからの電話であった。溝口君が短いあいだにせよ講義に復帰できたということが、どういうわけか私にとって何ものにも代えがたい救いと慰めである。

先に逝った人々、とりわけ親しかった人々は、今どうしているだろうか、と思うことがある。死をあんなに怖れ、死の事がいつも頭を離れなかった若い頃の私には今ひとつ実感がなかった想念である。私自身が死にぐんと近づいた年齢にさしかかったからであろう。先立った人々は、どうなったのだろうか。死は永遠に思索の問いを挑発してやまない真っ新な謎である。

ことしの 2 月 23 日、腎臓癌のため 46 歳で急逝した哲学者の池田晶子さんは平成 14 年 3 月に、H・G・ガダマーが亡くなった折にこんな葉書を私にくれたことがある。「昨日、ガダマー氏の訃報に接したところでしたので御本を読んで、ちょっと不思議な気持になりました。私は“人”というものは、居なくなることはないと思っています」。池田さんに贈呈したエッセイ集にガダマーの思い出を書いてあったところを読んでいた時に、たまたまガダマーの死を聞いたので、その気持を正直に書いたのだろう。池田さんはこの 2 年前の夏ハイデルベルクで 100 歳のガダマーと存在や死をめぐる見事な対談をしている。肉体をもった池田晶子という個人は死んでも、池田晶子の「自己」は死なないというのは、この思想家の確信であった。近頃の哲学研究家たちのあいだではほとんど理解されなくなった哲学の原点というものを生き抜いた人であったと私は思っている。

さて、先に逝った人々はどうなったのであろうか。彼等は生きている私たちの視野から消えたのであって、存在しなくなったわけではないと、私には思われる。この点で私は、すべての宗教のドグマから自由になって、われわれの自己といものの永遠性を明瞭に語ったゲーテの言葉に一番の親しみを覚える。エッカーマンによれば、ゲーテは 1824 年 5 月 2 日の夕方、ワイマール近郊の森の傍で、赤々と燃えながら沈んでゆく夕日を見ながら、つぎのように語ったと言う。溝口君のことを思いつつ、それを書き写しておくことにしよう。

「75 歳にもなると、ときどき死のことを考えないわけにはいかない。だが、死のことを考えても、私はすこしも不安ではない。われわれの精神は決して滅びることのない存在であり、永遠から永遠へと休みなく活動しつづけるものだということを確信しているからだ。それはちょうど、あの太陽がわれわれ地上にいる者の眼には沈んで行くように見えても、じっさいは決して沈むことなく、常に輝きつづけているようなものだ」。

（おおみねあきら　大阪大学・名誉教授）